

OCACCS 仮説に基づく英語虚辞構文の分析

田 中 裕 幸

要 旨

本稿では、(i) 対格付与子 *v* が外項の基底生成位置を非対称的に *c* 統御するとする仮説、および (ii) *there* を用いた英語の虚辞構文において *there* が EPP 素性による誘引により連結詞から「分離」し、表層の位置まで移動するとする仮説を採用することにより、*there* 構文の基本的特性に関する妥当な予測を導き出すことを目指す。(ii) により、定性効果、一致の随意性、*there* と連結詞の一対一対応、および Merge-over-Move 原理で排除されていた構造の不適切性を、また、(i) を組み合わせることにより、他動性制約、裸動詞句補文における *there* の生起、および経験者 PP による一致の阻止を、自然に説明できることを示す。

キーワード：*there* 構文 (*there* construction)、OCACCS 仮説 (OCACCS Hypothesis)、移動分析 (movement analysis)、他動性制約 (transitivity restriction)、介在効果 (intervention effect)

I 序

本稿では、対格付与子 *v* が外項の基底生成位置を非対称的に *c* 統御するとする OCACCS 仮説、および *there* を用いた英語の虚辞構文において *there* が EPP 素性による誘引により連結詞 (associate) から「分離」し、表層の位置まで移動するとする仮説を採用することにより、*there* 構文の基本的特性に関する妥当な予測を導き出すことを目指す。

II 節において分析の背景となる英語におけるパラメータ設定およびそれを

仮定した他動詞文・自動詞文の派生について述べた後、III節では本稿で採用する虚辞 *there* の生起に関する仮定を導入し、定性効果、一致の随意性、および複数の *there* が生起する構造や Merge-over-Move 原理で排除されていた構造の不適切性が説明されることを確認する。IV節からVI節では、III節までに導入した道具立てと OCACCS 仮説を組み合わせることで説明できる *there* 構文の特性を扱う。IV節では *there* 構文が一部の非対格自動詞としか相容れないことを、V節では *make*・*let* などの裸動詞句補文に *there* が生起可能であることを、VI節では経験者 PP によって連結詞との一致が妨げられる現象を、それぞれ扱う。VII節は結語に充てられる。

II OCACCS 仮説と英語のパラメータ設定

標準的に仮定されている他動詞文の基底構造 (1) においては、外項が *v*P 指定部に基底生成されるため、*v* が外項を c 統御することはない (Hale and Keyser 1993; Chomsky 1995)。従って、構造格は格付与子が c 統御する名詞句に対してのみ付与されるという仮定の下では、*v* が外項に格を付与する余地はない。

- (1) [TP T {EPP, Case, ϕ } [*v*P EA *v* {Case} [VP V IA]]]
 (EA: 外項(external argument); IA: 内項(internal argument))

これに対し、著者は一連の研究 (田中 2017; Tanaka 2018; 田中 2020; Tanaka 2022 その他) において仮説 (2) を提案し、(3) が (1) に代わる他動詞文の基底構造であると主張している。(本稿では外項を生成する範疇を Kratzer (1996) に倣い VoiceP とする。但し、格を与える機能を持つのは VoiceP を補部にする *v* である。)

- (2) OCACCS 仮説 (The Object Case Assigner C-Commands the Subject)
 a. T も *v* も全ての項の基底生成位置を c 統御する。

b. T も *v* も EPP 素性を持つ。

(3) [TP T {EPP, Case, ϕ } [_vP *v* {EPP, Case} [VoiceP EA Voice [VP V IA]]]]

(3) は、*v* が外項の基底生成位置を非対称的に c 統御しているという点、および *v* が EPP 素性を持つという点において (1) と異なる。

T と *v* の各形式素性 (EPP 素性、格素性、 ϕ 素性) は、それぞれ独立して c 統御領域の中で最も近い、適合する素性を求めて探査すると仮定する。EPP 素性は D 素性を持つ要素を (Chomsky 1995)、格素性はその時点で格付与がなされていない DP を、 ϕ 素性は解釈可能な ϕ 素性を持つ要素を求めて探査するものとする¹⁾。

Tanaka (2022) は一つの主要部を持つ形式素性が操作を誘発する順序は主要部ごとに決まっており、それが各言語の能格性を決定する主要なパラメータであると論じている。また、各素性は探査子、被探査子双方に多重性 (複数の相手と関係を持てるか否か) の設定がなされており、それが能格言語の中での類型を決定するという分析を提案している。

本稿では英語に議論の対象を絞るが、英語においては (4) のように上記のパラメータが設定されているものとする。{ $A \rightarrow B$ } は A が探査を行った後、 B が探査を行うことを表す。素性 F の手前の「u」は F が解釈不可能 (uninterpretable) であり、必ず何らかの要素と関係を結ぶ必要があることを、「i」は F が解釈可能 (interpretable) であり、その必要がないことを表す。前段落で述べた多重性については、英語では解釈不可能な素性は全て単一の (被) 探査子とのみ関係を結べるよう設定されているものとする。

- (4) a. 定形の T: {uCase/u ϕ \rightarrow uEPP} (探査子)
 b. 他動詞・非能格自動詞の *v*: {uEPP \rightarrow uCase} (探査子)
 c. 非対格自動詞の *v*: {uEPP} (探査子)

1) 各素性が独立して探査を行うとする点において、格付与が一致の反映であるとする Chomsky (2000) とは異なる前提を採る。

d. DP: {iD, i ϕ , uCase} (被探査子)

各要素の持つ素性は、(2b)による v の EPP 素性以外は、Chomsky (1995) で仮定されている標準的なものである。定形の T (4a) について、格素性の探査 (格付与) と ϕ 素性の探査 (一致) の間の順序はどちらかに決まっているはずであるが、どちらであっても本稿での議論には影響しないため、問わないこととする。EPP 素性による探査 (EPP 誘引) は必ず最後に起こる設定である。

以上を仮定すると、英語における非対格自動詞文の派生は (5)、他動詞文の派生は (6) のようになる。

(5) 非対格自動詞文 (e.g. *A man appeared.*)

- a. [$v_P v$ {EPP} [$v_P V$ [a man]]] (V=appear)
- b. [v_P [a man]_i v {EPP} [$v_P V t_i$]]
- c. [$T_P T$ {Case/ $\phi_i \rightarrow$ EPP} [v_P [a man]_i NOM v [$v_P V t_i$]]]
- d. [T_P [a man]_i NOM T {EPP} [$v_P t'_i v$ [$v_P V t_i$]]]

非対格動詞の場合、 v の EPP 素性が内項 a man を指定部に誘引する (5b)。次に導入される T が {Case/ $\phi \rightarrow$ EPP} の順序を持つので、T はまず a man への格付与と一致を行い ((5c); 上述の通り、二つの操作の順序は問わない)、次に EPP 素性により a man を TP 指定部に誘引する (5d)。この結果、内項が T の格 (主格) を持ち、動詞が内項に一致する文が派生される。

他動詞の場合、(4b) のように v が格素性を持ち、かつ EPP による誘引が格付与よりも先に起こる (能格言語の場合はこれが逆の順序になる (Tanaka 2022))。

(6) 他動詞文 (e.g. *We ate them.*)

- a. [$v_P v$ {EPP \rightarrow Case} [VoiceP we [$v_P V$ them]]] (V=eat)

- b. [_{vP} we_i v {EPP → Case} [VoiceP t_i [VP V them]]]]
 c. [_{vP} we_i v {Case} [VoiceP t_i [VP V them.ACC]]]]
 d. [TP T {Case/φ_i → EPP} [_{vP} we_i.NOM v [VoiceP t_i [VP V them.ACC]]]]]
 e. [TP we_i.NOM T {EPP} [_{vP} t'_i v [VoiceP t_i [VP V them.ACC]]]]]

最初に *v* の EPP 素性が外項 *we* を誘引する (6b)。A 移動の痕跡は統語操作に対して不可視であるという前提の下 (Chomsky 1995)、*v* は VoiceP 指定部の *we* の痕跡を無視し、内項 *them* に格を付与する (6c)。その後 T が *we* に対して格付与と一致を行い (6d)、T の EPP 素性が *we* を TP 指定部に誘引する (6e)。結果として外項が T の格 (主格) を、内項が *v* の格 (対格) を付与され、かつ動詞が外項に一致する文が生成される。

このように、(2) により、自動詞の場合でも他動詞の場合でも、*v* による EPP 誘引により何らかの D 素性を持つ要素が *vP* 指定部に移動することが求められる。これが以下の *there* 構文の分析において重要な役割を果たす。

III 移動に基づく *There* 構文の派生

虚辞 *there* とその連結詞 (*associate*) の構造的関係と、A 移動の移動先と移動元の構造的関係との間には平行性があることが古くから指摘されている²⁾。

- (7) a. There is someone in the garden.
 b. Someone_i is t_i in the garden.
 (8) a. There seems to be someone in the garden.
 b. Someone_i seems to be t_i in the garden.
 (9) a. *There seems that a man is in the room.

2) (9) は Chomsky and Lasnik (1993) の再録版 (N. Chomsky 1995. *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press. 収録) の66ページ ((89a), (90a)) より引用した。

b. *A man_i seems that t_i is in the room.

この平行性を捉えるために、there 構文においても何らかの A 移動（あるいはそれに相当する操作）が関与していると仮定することが一般的である。例えば Chomsky and Lasnik (1993) は there が TP 指定部に外的に併合され (externally Merged)、連結詞が LF で A 移動し、there と融合するという仮説を採っている。

本稿では there が表層で現れる位置に直接併合されるのではなく、(10) のように、連結詞に対して主要部 X による EPP 誘引が作用する時に、there が連結詞から「分離」して X の指定部に移動すると仮定する。(7a) のような文において there が TP 指定部より低い位置から移動してくるとする分析には、Groat (1999)、Bowers (2002)、Nomura (2004)、Richards and Biberauer (2005)、Deal (2009) 等がある。さらに、there が連結詞とは別に生成されるのではなく、連結詞の素性や一部の構成素が上方移動した結果生じるものであるとする分析として Sabel (2000)、Bobaljik (2002)、Abe (2018)、Honda (2020) 等がある。

(10) [XP there X {EPP, ...} [... [DP t a man] ...]]

理論的には、Groat (1999) や Abe (2018) が指摘するように、虚辞が TP 指定部への外的併合によって派生に導入されると仮定する場合、虚辞の併合を許すためだけに、補部内部 (c 統御領域) への探査を経ずに EPP 素性を満たすことが可能であると言わざるを得ない。この問題は there が vP 指定部等、より低い位置で外的に併合されて TP 指定部に移動するとする上掲の諸研究についても当てはまる。それに対し、(10) のような移動に基づく分析であれば、EPP 素性を含め、全ての探査子の素性が補部内部への探査により満たされると考えることができる。

一般的に、英語における不定 (indefinite) の DP は次の二つのうちいずれ

かの形式で構造に導入されると仮定する。一つ目は通常の DP であり、EPP 誘引を受けた場合、DP 全体が移動する。(7b)、(8b) の someone はこの形式で導入される。二つ目は、内部構造については詳細を保留するが、(10) のように EPP 誘引を受けた際、D 素性を担う要素として there のみが移動するような形式である (象徴的に [DP there associate] と表記する)³⁾。(7a)、(8a) ではこの形式の不定名詞句が導入される。there 構文の連結詞は不定名詞句でなければならないという「定性効果 (definiteness effect)」(Milsark 1974, 1977) は、後者の形式が不定名詞句のみに限定されることから直接説明される。

(11) There is {a/*the} wolf at the door. (Milsark 1977: 4)

また、there が連結詞とペアになって生成されることから、一つの連結詞に対して一つの there しか生じ得ないことも直ちに導ける。

(12) *There seems there to be a man in the room. (Deal 2009: 302)⁴⁾

ここで、there は D 素性の他に、随意的に既定値 (3 人称・単数) の ϕ 素性 (ϕ_{default}) を持つと仮定する⁵⁾。

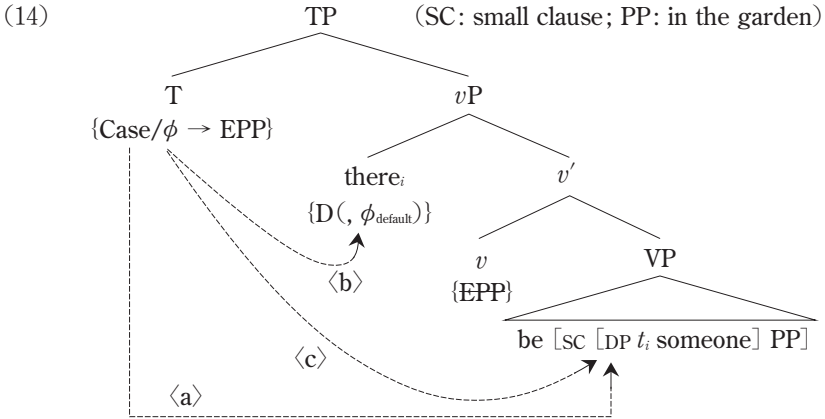
(13) there: {iD(, i ϕ_{default})} (被探査子)

3) 具体的には、(i) DP の指定部に there が生成されて移動する、(ii) DP の D 素性のみが移動し、移動先で there として具現化する、(iii) DP の主要部 D そのものが there であり、there のみが主要部かつ最大投射 ($D^0=DP$) として移動する、といった可能性が考えられる。(ii) は Bobaljik (2002) の考え方に近く、(iii) は Abe (2018) が採用している。

4) Groat (1999: 32) にも同様の例がある。

5) VI 節で見ると、PP は一般的に ϕ_{default} を持つと仮定する (28)。there は虚辞であるが、形態的には PP の代用形と同等であり、随意的にはあるが PP と同様に ϕ_{default} を持てると仮定するのは不自然ではないであろう。

以上を仮定すれば、(7a) のような単純な *there* 構文は (14) のように派生されることになる。



(4c) および (5) で見たように、非対格動詞の *v* は EPP 素性のみを持ち、それが補部の VP 内に生成された内項を誘引する。この時、内項は [DP *there* someone] として基底生成されているため、*there* のみが移動して (14) の構造が作られる。定形の T は (4a) の通りの設定を持つので、まず格付与と一致が格素性と ϕ 素性によって行われる。格に関しては、元位置にある連結詞の DP が格を受け取ることができる (格をまだ与えられていない) 唯一の DP であるので、連結詞が T の格を受け取る <a>。一致に関しては (13) に応じて二通りの可能性がある。*there* が規定値の ϕ 素性 (ϕ_{default}) を持っている場合、*vP* 指定部にある *there* が連結詞よりも T に近い位置にあるため、T の ϕ 素性は *there* の ϕ 素性と関係を結び、一致は既定値を取る 。*there* が ϕ_{default} を持っていない場合、T の ϕ 素性は ϕ 素性を持つ唯一の要素である連結詞と関係を結び、一致する <c>。その後 *there* は T の EPP 素性により TP 指定部に引き上げられ、派生は収束する。

上記の派生で特徴的であるのは、*there* が連結詞の位置から TP 指定部に至るまでに *vP* 指定部に立ち寄り、そこで T と一致の関係を持てることであ

る。従って、there が ϕ_{default} を持つか否かにより、T が連結詞と一致することもあれば、既定値の一致を示すこともあるという正しい予測が直ちに得られる (15)。仮に there が連結詞から TP 指定部へ一気に移動するならば、T が there のみと一致する状況は作られず、必ず連結詞と一致することになり、既定値の一致が可能であることが予測できない⁶⁾。

- (15) There is/'s/are lots of cookies on the table. (Schütze 1999: 469)

もう一点、移動に基づく there 構文の分析から得られる予測として言及すべきであるのは、(16b) のような非文を端的に排除できるという点である。

- (16) a. There_i is likely t_i to be someone in the garden.
b. *There is likely someone_i to be t_i in the garden.

Chomsky (1995: 344) は、(16) のペアは、不定詞節の T (to) の EPP 素性を満たすためには someone を移動させるよりも there を併合する方が経済的であること (Merge-over-Move 原理) を示唆すると主張するが、本稿が採用する移動に基づく分析では、そもそも there を外的に併合することはできない。そのため、(16b) を派生するためには、[DP there someone] 全体を基底生成位置から不定詞節の TP 指定部まで引き上げ、そこから there が分離して主節の TP 指定部に移動したと考えざるを得ない。しかし、[DP there someone] は EPP 誘引を受けると必ず there のみが移動するという前提により、[DP there someone] 全体が EPP 誘引によって移動することはない。従って、不定詞節の T の EPP 素性が誘引を行う時、[DP there someone] 全体を引き上げることは不可能であるため、(16b) を生成する手段はない。可能

6) Bobaljik (2002: 247) は、既定値の一致が許されず、連結詞との一致が義務的である話者・方言の存在に言及している。このような文法における一致の義務性は、there が常に連結詞の解釈可能な ϕ 素性を随伴する (there: {uDm, $i\phi_{\text{associate}}$ }) と考えることにより導出することができる。

なのは基底生成位置から *there* のみが非定形の T に引き上げられ、さらに主節の T に引き上げられる派生のみであり、その結果 (16a) を得る⁷⁾。

IV 他動性制約

there 構文に生起できる動詞は *be* 以外にもあるが、非常に限定されている。Deal (2009) によれば、*there* 構文に生起する動詞は起動動詞 (*inchoative*) でない非対格動詞に限られ、他動詞、非能格動詞、および起動動詞は生起できない。((17)、(18)、(19a) は Deal (2009: 286) より。)

- (17) a. *There appeared a shadowy figure in the doorway.*
 (起動動詞でない非対格動詞)
- b. *There arrived a train in the station.*
 (起動動詞でない非対格動詞)
- (18) a. **There melted a block of ice in the front yard.* (起動動詞)
- b. **There slowed a train on the eastbound track.* (起動動詞)
- (19) a. **There laughed a man in the hallway.* (非能格動詞)
- b. **There finished somebody the assignment.* (他動詞)
 (Alexiadou and Anagnostopoulou 2001: 195)
- c. **There will someone eat a bagel.* (他動詞) (Bowers 2002: 194)
- (20) [TP *there* T [_vP EA *v* VP]]

標準的な多重動詞句構造 (1) を前提にした場合、(19) の非能格動詞と他動詞の例を排除するのは容易ではない。(20) のように、*there* が現れる TP 指定部と外項が生成される *v*P 指定部は局所的な関係にあり、*there* 構文でなければ通常は外項が TP 指定部に A 移動できる (*Somebody_i t_i finished the*

7) Deal (2009) は (16b) の *someone* の表層の位置が「意味的に致命的な位置」(semantically lethal position) であるため、ここに項が現れることができないと述べているが、上述の分析ではそのような仮定は不必要である。

assignment.)。介在する要素も障壁となるような領域も存在しない状況において、*there* と連結詞を結び付けるメカニズムが阻害されるとは考えにくい。

Deal (2009) は標準的な多重動詞句 (1) を前提に、*v* にはいくつかの種類があり、他動詞および非能格動詞の場合は *v* は外項を生成する Voice、起動動詞の場合はイベント項を生成する CAUSE⁸⁾、起動動詞でない非対格動詞の場合は項を何も生成しない *v* であると仮定している。また、指定部に項を生成する主要部の指定部には虚辞を生成することができないと仮定し、これが Voice、CAUSE を持つ動詞が *there* 構文と相容れない原因であるとする分析を提案している。

これに対して、OCACCS 仮説に基づく (3) の構造を前提にすれば、動詞の項は全て *v* の補部内に生成されるので、Deal の Voice/CAUSE は *v* とは別の主要部となり、(17)、(18)、(19) の構造はそれぞれ (21)、(22)、(23) のようになる。(α=[DP *there* associate])。関係のない素性は省略している。

(21) [TP T {Case} [_vP *v* {EPP} [VP V α]]] (起動動詞でない非対格動詞)

(22) [TP T {Case} [_vP *v* {EPP} [CAUSEP CAUSE⁰ [VP V α]]]] (起動動詞)

(23) [TP T {Case} [_vP *v* {EPP} [VoiceP α Voice⁰ [VP V ...]]]]

(他動詞・非能格動詞)

ここで *v* がフェーズ主要部 (Chomsky 2000) であるか否かに関して、(24) を仮定する。

(24) *v* が VP を補部に取りえない場合、またその場合に限り、その *v* はフェーズ主要部である。

これは実質的に、*v* が VP を直接補部に取りえる場合、その補部は外部から見て

8) Deal (2009) での表記は CAUSE であるが、ここでは CAUSE と記す。

透明であるが、この2者の間に VoiceP や CAUSEP など、追加の項を導入する他の投射が介在する場合、不透明になるという仮説である。これとフェーズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition: PIC (Chomsky 2000)) により、VoiceP・CAUSEP の内部は、それを補部にする主要部 (v) を除き、外部からアクセスできないことになる。(21) では v が VP を補部に取っているため T と内項との間にフェーズが介在せず、T が α に対して格を付与することができる。(この格付与が (14) の派生に含まれていることに留意されたい。) 一方で (22)、(23) では v がフェーズ主要部であり、その補部が不可侵領域となる。 v 自体はその内部にアクセスできるため、there を EPP 誘引することはできるが、 α は VoiceP/CAUSEP 内に留まったままである。従って、T が格を付与することができる名詞句が存在せず、派生は破綻する⁹⁾。つまり、PIC による不可侵領域内に [DP there associate] が基底生成された場合に T の格付与が失敗することから、起動動詞でない非対格動詞のみが there 構文に生起できることが説明される。

この分析で重要なのは、OCACCS 仮説に従って全ての項が v の補部内に基底生成されるため、(22)、(23) においては外項を含めた全ての項が PIC による不可侵領域内に基底生成されるという点、および、[DP there associate] が EPP 誘引を受けた時に there のみが移動し、連結詞は基底生成位置に留まるという点である。there が生起しない文の場合は、(6b) のように、DP 全体が v の EPP 素性により不可侵領域から抜き出されるため、T との格関係を構築することができる。

V 裸動詞句における虚辞の生起

表面上 to を伴わない裸動詞句を従える make、let 等の使役動詞は、直後に虚辞 there が生起することを許す¹⁰⁾。

9) (4a) の通り、英語の定形の T は格付与をしなければならないと仮定している。

10) make、let はコントロール構造 (V DP_i [PRO_i V ...])、ECM 構造 (V [DP VP]) のいずれも取り得るが (柴原・松山 2001: 3.4 節)、ここでは虚辞 there が生起する後者の構造に着目する。

- (25) I made there be silence in the courtroom. (Newmeyer 1975: 85)

非定形の T の具現化である to やアスペクト表現が生起しないことから、make、let の補部として埋め込まれているのは *v*P であると考えるのが一般的である。ここで標準的な *v*P 構造 (1) を仮定すると、*v* は EPP 素性を持たないので、EPP 素性により there を連結詞から分離させる派生は不可能であると予測される¹¹⁾。

一方で、*v* が EPP 素性を持つとする OCACCS 仮説 (2) の下では、この事実は自然に予測することができる。*v* が EPP 素性を持つため、there が *v*P 指定部に引き上げられ、連結詞が上位の *v* から格を与えられれば、派生は収束する。(格付与子である上位の *v* と被格付与子である DP の間には IV 節で定義したフェーズ境界が介在しないことに留意されたい。)

- (26) I PAST [_vP *v* [_{VP} make [_vP there *v* {EPP} [_{VP} be [_{DP} *t* silence]]]]]]
↑
Case

VI 経験者 PP による介在効果

(15) のように there 構文において連結詞との一致が随意的であることは、(13) で仮定したように there が既定値の ϕ 素性を随意的に持つことから説明できる。本節では、繰り上げ動詞 seem が経験者 PP を伴って不定詞補文を取る場合、(27a) のように some men が繰り上がれば seem の DP との一致は義務的であるが、(27b) のように there が繰り上がれば一致が不可能に

11) 更に、(1) を仮定すると、*v* が EPP 素性を持たないため、非対格動詞の内項が表層の位置に上昇すること (*Heat makes a gas expand.* (小西 1980)) は、非対格動詞の場合のみ *v* が EPP 素性を持つという例外的な仮定を設けない限り正しく予測できない。本稿の分析では、全ての *v* が EPP 素性を持つと仮定されているため、(i) においても *a gas* が *v*P 指定部に引き上げられ、観察される語順が得られる。

(i) Heat T make [_vP [_{DP} *a gas*], *v* {EPP} [_{CAUSEP} CAUSE [_{VP} expand *t*]]]

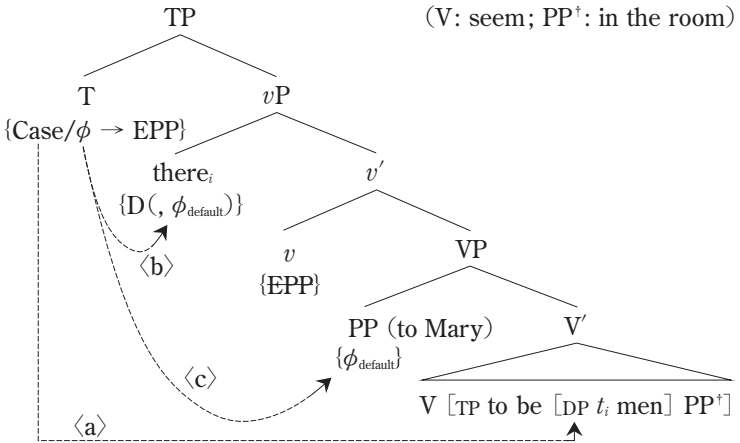
なるという現象について考察する。

- (27) a. Some men seem to Mary to be in the room. (Abe 2018: 98)
 b. There seems/?*seem to Mary to be men in the room.
 (Boeckx 2000: 371)

ここで (28) の通り、PP は既定値の ϕ 素性を持ち、D 素性と格素性を持たないと仮定すると、(27b) の派生は (29) のようになる。途中の痕跡は省略してあるが、(29) は there が連結詞の内部から埋め込み節の v および T の指定部にそれぞれ EPP 誘引された後、主節の v の EPP 素性に引き上げられ、主節の T が導入された段階を表している。この直前に there は経験者 PP を越えているが、PP は D 素性を持たないため誘引の対象にはならず、D 素性を持つ there が誘引されて (29) の状況に至る。

(28) PP: $\{i\phi_{\text{default}}\}$ (被探査子)

(29) TP (V: seem; PP[†]: in the room)



ここで T は連結詞 DP に格を与える <a>。T と連結詞の間には there と経験者 PP が介在するが、どちらも格を受け取ることはできないので無視され

る。また、両者の間にフェーズ境界も存在しないため、PICによって格付与が阻止されることもない。Tの ϕ 素性による一致については、thereが既定値の一致素性(ϕ_{default})を持つか否かによって二通りの派生が考えられる。thereが ϕ_{default} を持つ場合、Tの ϕ 素性はthereの ϕ_{default} と関係を結ぶ〈b〉。thereが ϕ_{default} を持たない場合、Tの ϕ 素性の探査はthereを通り越して経験者PPの ϕ_{default} に到達する〈c〉。従っていずれの場合でも、Tの一致は既定値を取らざるを得ず、連結詞と一致する余地はないという正しい予測が得られる。(派生はこの後TのEPP素性によりthereがTP指定部に引き上げられ、収束する。)

一方で、some menが繰り上がる(27a)では、some menが(29)におけるthereの位置、つまり主節のvP指定部に繰り上がるため、Tはsome menと一致するしかない。(29)と同様に、主節のvが埋め込み節からsome menを引き上げる際にはD素性のみを探査するので、経験者PPが飛び越されることになる。移動する要素がthereであれsome menであれ、PPを飛び越す際にはthere/some menの ϕ 素性が随伴される(Tanaka 2004)。

この分析で最も重要なのは、全てのvがEPP素性を持つため、繰り上がる要素が繰り上げ動詞のvP指定部に必ず立ち寄るという点である。ここに立ち寄った段階で、Tがsome menと一致するのか、thereないしPPと一致するのが通常の ϕ 素性の探査によって決定する。Tと経験者PPとの間に着地点があることを仮定しない理論であれば、このような単純な分析は不可能であり、(i) TとTP指定部の間の一致を認めるか、(ii) thereが解釈不可能な ϕ 素性を持ち、TP指定部に入ったthereがTを逆に探査するなど、複雑なメカニズムを持ち込まざるを得ない。(i)はChomsky(1993)等の枠組みでは仮定されていたことであるが、探査領域が常に主要部の補部内に限られると仮定する、本稿を含めた現在の枠組みでは認められない。(thereが表層の位置よりも下位の位置から上昇するとする分析を採用する理由もそこにある。) (ii)はChomsky(2000)で採用されているが、これを認めることは、派生は常に各段階で作られている構造のルートの主要部によって駆動

されるという、強い循環性を放棄することになる¹²⁾。

VII 結語

本稿では、連結詞から *there* が EPP 誘引によって遊離するという仮定により、英語の *there* 構文の定性効果、一致の随意性、*there* と連結詞の一対一対応、および Merge-over-Move 原理で排除されていた構造の不適切性を、また、OCACCS 仮説を組み合わせることにより、他動性制約、裸動詞句補文における *there* の生起、および経験者 PP による一致の阻止を、自然に説明できることを示した。いくつかの研究において (Chomsky 2000; Deal 2009; Abe 2018)、*there* が解釈不可能な素性を持ち、*there* が TP 指定部から探査して T と関係を結ぶという仮説が提案されているが、前節および脚注12で述べたとおり、これは反循環的な操作の存在を認め、理論を不必要に複雑にするものである。本稿の枠組みではその必要はなく、T が *there* や連結詞に対してトップダウンで格付与や一致の操作を行うという単純な仮定を維持することができる。また、部分格 (partitive Case) (Belletti 1988; Lasnik 1995) の仕組みを取り入れる必要もない。

今後の発展として、虚辞構文の分析については、本稿では触れられなかった、虚辞 *it* が生起する構文、アイスランド語等の他動詞に基づく虚辞構文等をどのように扱うかが課題となる。また、OCACCS 仮説が英語の *there* 構文の他動性制約を導出するのに重要な役割を担う可能性を示したが、Alexiadou and Anagnostopoulou (2001) が指摘するように他動性制約はこの構文以外にも、ロマンス諸語の文体的倒置 (stylistic inversion) や日本語の主格・属格交替など、様々な言語において形を変えて現れる。OCACCS 仮説に基

12) Tanaka (1998) は、素性は (現在の用語で言えば) 探査子・被探査子の区別が内在的に決まっており、解釈不可能な探査子 (例えば T の ϕ 素性) は、それを持つ主要部の投射が他の主要部の投射に埋め込まれるまでに満たされなければならないが、解釈不可能な被探査子 (例えば名詞句の格素性) はその条件を免れると主張している。本文 (ii) の仮説を採用することは、循環性を放棄するだけでなく、探査子・被探査子の区別を排除することで、*there* 構文とは無関係なところで過剰生成のリスクを負うことを意味する。

づく他動性制約に対するアプローチを如何に拡張していけるか、検討する必要がある。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

参考文献

- Abe, Jun. 2018. How to probe expletives. *Studia Linguistica* 72: 76-112.
- Alexiadou, Artemis, and Elena Anagnostopoulou. 2001. The subject-in-situ generalization and the role of Case in driving computations. *Linguistic Inquiry* 32: 193-231.
- Belletti, Adriana. 1988. The case of unaccusatives. *Linguistic Inquiry* 19: 1-34.
- Bobaljik, Jonathan D. 2002. A-chains at the PF-interface: Copies and ‘covert’ movement. *Natural Language and Linguistic Theory* 20: 197-267.
- Boeckx, Cedric. 2000. Quirky agreement. *Studia Linguistica* 54: 354-380.
- Bowers, John. 2002. Transitivity. *Linguistic Inquiry* 33: 183-224.
- Chomsky, Noam. 1993. A minimalist program for linguistic theory. In *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, ed. Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1995. Categories and transformations. In *The minimalist program*, 219-394. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam, and Howard Lasnik. 1993. The theory of principles and parameters. In *Syntax: An international handbook of contemporary research*, ed. J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, and T. Vennemann, volume 1, 506-569. Berlin: de Gruyter.
- Deal, Amy R. 2009. The origin and content of expletives: Evidence from “selection”. *Syntax* 12: 285-323.
- Groat, Enrich M. 1999. Raising the Case of Expletives. In *Working Minimalism*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hale, Kenneth, and Samuel J. Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, ed. Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 53-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Honda, Takahiro. 2020. A split phi-features hypothesis and the origin of the expletive *there*. *English Linguistics* 37: 1-33.
- Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In *Phrase structure and the lexicon*, ed. Johan Rooryck and Laurie Zaring, 109-137. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.

- Lasnik, Howard. 1995. Case and expletives revisited: On greed and other human failings. *Linguistic Inquiry* 26: 615-633.
- Milsark, Gary. 1974. Existential sentences in English. Doctoral dissertation, MIT.
- Milsark, Gary. 1977. Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English. *Linguistic Analysis* 3: 1-29.
- Newmeyer, Frederick. 1975. *English aspectual verbs*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nomura, Masashi. 2004. Expletives move! In *Proceedings of the Thirty-Second Western Conference on Linguistics*, ed. Brian Agbayani, Vida Samiian, and Benjamin V. Tucker, 207-220.
- Richards, Marc, and Theresa Biberauer. 2005. Explaining *Expl*. In *The function of function words and functional categories*, ed. Marcel den Dikken and Christina Tortora, 115-153. Amsterdam: John Benjamins.
- Sabel, Joachim. 2000. Expletives as features. In *Proceedings of the 19th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. Roger Billerey and Brook Danielle Lillehaugen, 411-424.
- Schütze, Carson T. 1999. English Expletive Constructions Are Not Infected. *Linguistic Inquiry* 30: 467-484.
- Tanaka, Hiroyuki. 1998. The “avoid embedding” condition and the checker/checkee asymmetry. *English Linguistics* 15: 281-289.
- Tanaka, Hiroyuki. 2004. On the minimality of generalised pied-piping. *Lingua* 114: 911-933.
- Tanaka, Hiroyuki. 2018. The derivation of passives and the height of *v* relative to the external argument. Poster presented at the 92nd Annual Meeting of the Linguistic Society of America.
- Tanaka, Hiroyuki. 2022. Ergativity as a natural manifestation of the *v* > EA base. In *Proceedings of the Linguistic Society of America*. URL <https://doi.org/10.3765/plsa.v7i1.5254>.
- 栗原和生・松山哲也 (2001) 『補文構造』東京：研究社。
- 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』東京：研究社出版。
- 田中裕幸 (2017) 「対格付与と外項基底生成位置の相対的な高さについて—受動態を中心に」『関西英文学研究』10：33-40。
- 田中裕幸 (2020) 「OCACCS 仮説と能格性」『商学論究』67(4), 53-70. 関西学院大学商学研究会。